

【台湾魅力発信】

鍾興華・原住民族委員会副主任委員特別インタビュー（前編）

公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所
総務室主任 寺山 学

今般、台湾の新たな魅力発信との観点から、原住民族政策を所管する行政院原住民族委員会の鍾興華・常務副主任委員（副大臣に相当）から台湾原住民の現状やその魅力についてお話を伺いました。（※日本では「先住民」という言葉が一般的ですが、台湾では「原住民」と用語が定着しています。現地での呼称を尊重するため、本文では「原住民」と表記いたします。）

- ・インタビュー実施場所：行政院原住民族委員会
- ・インタビュアー：公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所総務室主任・寺山学

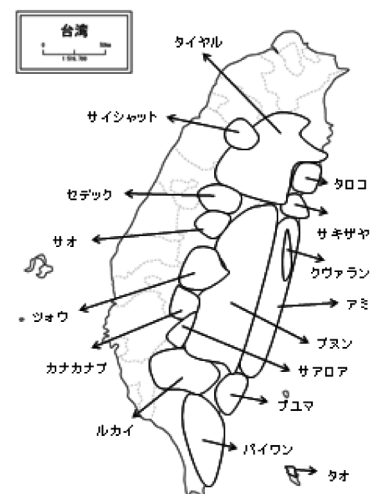
＜鍾興華氏 略歴＞

- ・パイワン語名：Calivat・Gadu
- ・1960年6月13日生まれ
- ・屏東出身（パイワン族）
- ・国立政治大学民族学研究所卒業
- ・主な経歴：
原住民族委員会文化園区管理局事務委員会組長
台湾省政府法規委員会編集者
東呉大学、実践大学、大仁科技大学兼任講師
原住民族委員会常務副主任委員（現在）



【台湾原住民についての予備知識】

台湾では「四大エスニシティー（四大族群）」という言葉があり、「ミinnan人」、「客家人」、「外省人」とともに「原住民」が「四大エスニシティー」の一つを構成しています。「原住民」は一般的に17世紀以降、漢民族が台湾に移り住む前から台湾で居住していた先住民を指します。ただ、「原住民」と一言と言っても、その実態は非常に多元的であり、現在16もの異なる民族が「原住民」として政府の認定を受けています。具体的には、アミ族、パイワン族、タイヤル族、タロコ族、ブヌン族、プユマ族、ルカイ族、ツォウ族、サイシャツ



台湾原住民分布図（筆者作成）

ト族、ヤミ（タオ）族、クヴァラン族、サオ族、サキザヤ族、セデック族、カナカナブ族、サアロア族、の16族ですが、それぞれの民族の間では独自の言語が話されており、民族間で生活慣習や文化も異なっています。

台湾原住民は独自の文化を発展させており、例えば原住民の歌や踊りなどは国際的にも高い評価を受けています。山地に住むブヌン族の「アワの豊作を祝う歌」は優れた八部合音の合唱曲として国際的に高く評価されています。また、平地に住むアミ族の歌「老人の酒飲み歌」は1996年アトランタオリンピックのテーマ曲（エニグマの「Return To Innocence」）でも用いられ、国際的にも有名になりました。

●拡大を続ける「原住民」としてのアイデンティティ

（寺山）有名な観光地である日月潭の近くに原住民をテーマとした民俗村「九族文化村」があるように、戦後長らく台湾において原住民は「9族」とであると認知されてきたかと思います。それが近年、原住民意識の台頭に伴い、多くの民族でアイデンティティが確立され、新たな民族として政府が公認するようになってきました。こうした各民族の意識の高まりの背景にはどういったことがあると考えますか。

（鍾興華・副主任委員）これには深い歴史的背景があると思います。1895年から日本時代が始まりましたが、当時日本から民族学者などの専門家が台湾にやってきて、台湾中の原住民をくまなく調査し、異なる特性から少なくとも7つの民族に分類されることが判明しました。その後、戦後になると9族（アミ族、タイヤル族、ブヌン族、パイワン族、ツォウ族、ヤミ族、ルカイ族、プユマ族、サイシャット族）との認識が一般化しました。

しかし、2000年代に入ると政府の積極的な原住民政策によって、それまで同一の括りとされた民

族の中から、「自分たちは異なる民族である」との主張が上がるようになります。まず、ツォウ族に分類されていたサオ族が、-このサオ族は白鹿を追って阿里山を越え日月潭に渡ったとの言い伝えを持つ民族ですが-、自分たちは阿里山のツォウ族とは異なるとの認識が深まり、学術研究でも両者の違いが明らかになったことから、2001年に政府はこの2族を異なる民族と認め、10族になりました。ここから、自族の独自性を主張する声は一



台東市にあるブヌン文化館
（魅力あるブヌン族の文化について展示）
（台東市海端区海端村2鄰山平56号）



宜蘭市にあるタイヤル文化館
（宜蘭市南澳区蘇花路2段379巷2号）



霧社事件の発生地・南投県霧社
：セデック族の居住区

気に高まり、クヴァラン族（2002年）、タロコ族（2004年）、サキザヤ族（2007年）、セデック族（2008年）、サアロア族（2014年）、カナカナブ族（2014年）、と次々に政府の認定を受け、結果として現在の16族になりました。クヴァラン族、サキザヤ族は長い間、アミ族として分類されてきましたが、独自の言語と文化が認められ、アミ族から切り離して一族として認められました。また、タイヤル族からは、セデック族、タロコ族が独立しました。南部の高雄や阿里山に住むツォウ族からも、サアロア族、カナカナブ族が独立しました。

これ以外にも、現在政府に認定申請を行っている原住民がいるため、現在の「16」ととどまらず、今後原住民の数は更に増えていくことになるでしょう。

●平地に住む原住民-平埔族の存在

（寺山）先ほど鍾副主任委員からは、自身の身分を認定してもらおうと努力する原住民の動きについて話がありました。これに関連し、かつて台湾西部で生活していた原住民である平埔族についてお伺いしたいと思います。平埔族は長らく漢民族に同化されたと見られていましたが、近年平埔族の間でもアイデンティティの高まりが見られ、各

地の地方政府もその文化を保護するための施策を打ち出しています（例えば、総統府の前の道を「ケダガラン道」と改名するなど）。この平埔族の現状について教えていただけますか。

（鍾興華・副主任委員）清朝時代から、「平埔族」は「熟番」、「高山族」は「生番」と呼ばれ分類されてきました。日本統治時代には戸籍上でも、「熟番」と「生番」の区分がなされました。その後、「高山族」は戦後、「平地同胞」と「山地同胞」に



温泉で有名な台北郊外北投にあるケダガラン族文化館：ケダガラン族は台北周辺の平埔族

（台北市北投区中山路3-1）



台南の平埔族：シラヤ族
阿立祖信仰という独自の信仰が残されています
（吉貝婁（kabuasua）：台南市東山）

分類され、後に総称して「原住民」と呼ばれるようになりました。

それでは平埔族はどうでしょうか。平埔族は多くが台湾西部の平原で暮らしていたため、漢民族との接触が多く、清朝時代初期から採られてきた漢化政策が進みました。それにより、平埔族の多くが自身の言葉を失い、またアイデンティティを失い、漢民族化してしまいました。完全に漢民族化したものと思われましたが、長年の研究の結果、近年になり平埔族の文化はまだ台湾に残っていることが明らかになってきました。

法律面でも平埔族の身分保障が進んでいます。昨年改定した原住民身分法では、「平地原住民」、「山地原住民」の他に、「平埔原住民（平埔族）」が加わり、法的にも平埔族の身分保障が強化されました。現在、行政院や原住民族委員会では平埔族を加えたこの分類を基に原住民関連政策を進めています。

（寺山）より詳しく平埔族の歴史を知るためには、台湾のどの地域を訪問するのが良いですか。

（鍾興華・副主任委員）台南の東山区にあるシラヤ国家風景区がおすすめです。

私は北海道を何度も訪れ、北海道のアイヌ協会の方と交流したことがあります。平埔族について紹介し、交流を行ったところ、北海道のアイヌ族と平埔族は似ている点が多くあることに気がつきました。例えば、原住民としての言語や文化が消失しかけている部落が多くあること、部落の多くの住民が都会に移住してしまったことなどです。

この点、台湾の中では台南のシラヤ族は言語や文化の復興が進んでおり、独自の祭事なども行われているため、台南のシラヤ族居住区に行けば平埔族のことを良く知ることが出来ると思います。

●原住民言語復興に向けた動き

（鍾興華・副主任委員）シラヤ語の復興が進んでいると言いましたが、全体として原住民の文化が

存続の危機に直面していることは事実です。私は以前、台南のある部落の祭事に参加した際、原住民語の歌を歌っていたおばあさんに、その歌詞はどういう意味か聞いてみたところ、「意味は分からない」との答えが返ってきました。なぜこうした言語の消失が起きたのでしょうか。それは、1990年代頃まで、原住民の多くが、原住民としての身分を隠さなければならないような時代だったことが大きいです。当時の社会環境の中では、自身が原住民であることを認めることは不利なことだったのです。学校教育も同様でした。学校で原住民の言葉をうっかり話してしまうと、罰として立たされる様な時代だったのです。こうした時代背景の中で、先ほどのおばあさんのように、多くの原住民は言葉を失い、アイデンティティを失ったのです。これは大変悲しい事実です。

1990年代以降は社会環境も変化し、政府が率先して原住民の文化を守るため様々な努力を行ってきました。例えば、1996年には行政院に「原住民族委員会」が設立され、法律の制定や憲法の改正を促し、多元的な原住民文化を尊重する動きが強



シラヤ文化会館

シラヤ族の文化について紹介。入口にはシラヤ語で「歓迎」を意味する言葉が書いてあります。

（台南市新化区永新路11号）



シラヤ語の絵本（於：シラヤ文化会館）
：台南ではシラヤ語復興の動きが見られます



普善寺（または同興宮）：台中の平埔族・パポラ族のお寺。漢民族のお寺のようですが、実は平埔族のお寺です
（台中市沙鹿区洛泉里新生路 33-1 号）

まりました。また、こうした努力の結果、原住民の社会的な認知は向上し、原住民自身も原住民だと名乗りやすい環境になりました。

しかし、原住民の言語復興への道のりはまだまだ険しいものがあります。原住民の若者の多くは幼少期から原住民の言葉を使わずに育っており、言語の消失が加速しています。年配の原住民の方々は、今後我々がいなくなったら自分たちの美

しい文化が消失してしまうのではないかとという大きな不安を抱えています。我々はこうした難しい局面に立ち向かわなければなりません。

こうした状況の中、2014年6月、原住民族語の普及や研究を強化するため、原住民族委員会の下に「原住民族語言研究發展センター」を設立しました。このセンターでは原住民族語の研究や言語教育の普及などを行っており、具体的には、絵本や教材などの制作、原住民族語の試験の普及などを通じて、原住民族語の言語復興に務めています。今後、同センターを中心として原住民族語の復興に取り組んでいきます。

（寺山）原住民族語には歴史的に文字が無いかと思いますが、言語の復興にあたり文字の面での難しさはありますか。

（鍾興華・副主任委員）ご指摘のとおり、原住民族語の文字は厳格に言えば無いです。トーテムの文様や彫刻などが広義でいえば伝統的な「文字」の一種になりますが、書面では歴史的にはローマ字、日本のカタカナや台湾の注音などを用いて表記されたこともあります。

統一の文字がないことの不便さに対処するた



台北郊外のタイヤル族の街・烏来の道案内
：漢字とローマ字の併記（新北市烏来区）

め、2015年には、教育部と原住民族委員会が原住民族語の文字表記を英語のローマ字表記に統一しました。一方で、この表記では「CA」を「ザ」と発音するなど、特殊な表記となるため、慣れるまで時間を要し、習得が難しいという問題点も指摘されています。

●原住文化に触れることができる観光スポット

(寺山) 多元的な原住民の文化について、理解を深めることができるお薦めの観光スポットはありますか。

(鍾興華・副主任委員) 私は屏東県出身なので、まず屏東を紹介します。パイワン族の「老七佳石板部落」は、台湾に現存する最大で最古の石板家屋集落です。現在も50棟余りが完全な状態で残されており、台湾の潜在的な世界遺産候補の一つだと思います。この石板家屋は300~400年の歴史があり、パイワン族の人々は石の色で材質を見分けて家を建ててきました。石の色は濃ければ濃いほど硬いため、黄土色の石は壁や階段に使われます。この伝統的な工夫によって石板家屋は漏水せず通気の良い造りになっています。他には三地門や霧台で原住民の石板家屋を見ることが出来ます。

他には飛行機で行くことができる、蘭嶼という離島があります。ここにはヤミ族が生活していま



老七佳石板部落 (屏東県春日郷)
※文化部HPより



谷関温泉にある温泉文化館
(台中市和平区博愛村東関路一段102号)

すが、この地では、台湾本島から離れた離島という地理的特徴により、独自の言語や文化が育まれてきました。また、ヤミ族は海洋民族なのでシュノーケリングなど海に関する観光が多いのも特徴的です。祭典もあり、毎年5月前後に行われるトビウオ収穫祭は有名です。トビウオはヤミ族の人々にとって単なる食べ物だけでなく、生活のリズムや祭事のよりどころになっています。そのほか、蘭嶼では潜水儀式が行われたり、伝統的模様の描かれた船があったり、また半地下式の住居を見学することもできます。

また、温泉と原住民とは密接な繋がりがあり、多くの温泉は原住民の居住地にあります。有名な北投温泉だけでなく、屏東にある旭海温泉(パイワン族)、台中(谷関温泉:タイヤル族)、新竹(清泉温泉:サイシャット族、タイヤル族、尖石温泉:タイヤル族)、花蓮(紅葉温泉:タイヤル族)など各地の原住民居住区には有名な温泉地があります。こうした温泉地にも是非足を運んでもらい、原住民の文化に触れてもらえたら嬉しいです。(後編に続く)

(編集:寺山学、柴原希恵、樺島彩波、写真:寺山学)